

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

「正直なシグナル」としての「ほほえみ」表情

著者	田村 亮
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	8
ページ	71-74
発行年	2008-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000780/



「正直なシグナル」としての「ほほえみ」表情

“Smile” as “Honest Signal”

田 村 亮

TAMURA, Ryo

目 的

「微笑み」は友好の意思を示す表情として用いられ (Jakobs, Manstead, & Fischer, 1999)、この表情を表出することによって、社会的に望ましい行動をとれる人物と判断され (Matsumoto & Kudoh, 1993)、また誠実さの証拠として解釈される (Bugental, 1986)。こうした微笑み表情は、従来ダブル・バインド理論 (Bateson, 1972) に代表される記号論的観点から、その進化の過程が説明されてきた。記号論的には、本来「怒り」を意味するはずの「歯の剥き出し」という表情が、「噛み付き」を行なわないことで、むしろ敵意のなさを示す表情に意味が変化するという説明がなされる。

しかしながら、実際にはこのような仮説を支持する実証的な証拠は現在までに得られていない。そこで本研究は、微笑み表情が「口角を引き上げる」という動きをもつ理由を、「正直なシグナル」という観点から再検討する。仮に微笑みを表出することで、身体的な能力が低下するならば、本心では他者に対して搾取の意図を持っていたとしても、事実上その相手を攻撃することはできない。翻って、そうした表情を知覚する他者は、自分は搾取

されないことを理解し安心する。すなわち、この仮説によれば、微笑み表情は、相手を搾取する意図がないことを示す正直なシグナルとして機能することになる。本研究はこの仮説を以下のような実験を行うことで検証する。

方 法

実験参加者

埼玉学園大学の男子学生28名。実験参加者は、以下に説明する2つの条件のどちらかに、ランダムに割り振られた。

条件

本実験の目的は、微笑み表情を表出している最中に、身体的能力が低下する可能性を検討することにある。そのため本実験では、微笑みを表出させる実験条件に対し、ニュートラル表情を保持させる統制条件を設定する。どちらの条件においても、要求特性の生起を抑制するため、ペンテクニック (Strack, Martin, & Stepper, 1988) を応用した方法を用いて、それぞれの表情を導出した。

微笑み表出条件では、歯科治療で使用されるコットンロールを歯で挟ませ、それに唇が接触しないように指示した (写真1)。一方、ニュートラル表情持続条件では、同じくコッ

キーワード：表情の進化、ペンテクニック、握力

Key words : evolution of facial expression, pen technique, handgrip

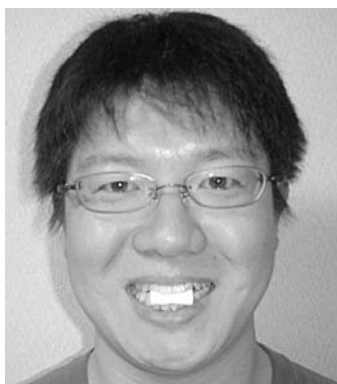


写真1



写真2

トンロールを歯で挟ませ、必ずそれを唇に接触させるように指示した（写真2）。これらの操作を行うことで、実験参加者に気づかれることなくそれぞれの表情を表出させることが可能となる。

なお、両条件とも前歯でコットンロールを挟むという点は同一のため、奥歯のかみ合わせの程度に違いはない。よって、両条件における身体的能力の差の原因を、奥歯の食いしばりやすさの違いに求めることはできない。

実験課題

実験参加者はまず、微笑みもしくはニュートラル表情を表出した状態で、握力の測定を行った。測定は利き腕で一回のみであった。

次にそれぞれの表情を表出した状態のまま、その時点での自分の感情状態を質問紙（McHugo, Smith, & Lanzetta, 1982）により回答した。この課題は、本人に気づかれないように表出させた表情が本人の感情状態に影響を与えるか、すなわち、微笑みを表出することにより快感情が生起するのかという問題を、探索的に検討するために行った。

さらに、両条件間で握力の値に差があった場合、それが体格の違いによるものでないことを確認するために、本実験の最後に、実験参加者の体重と身長を測定した。

結 果

体格差

実験参加者の体重と身長を両条件間で比較したところ、どちらにおいても差は認められなかった（ニュートラル表情条件：体重60.6kg 身長168.9cm、微笑み表出条件：体重59.9kg 身長169.7cm）。よって、これ以降の分析における握力の差は、体格の差により生じたとは言えない。

握力差

本研究の「微笑みを表出している最中、身体的な能力が低下する」という仮説を検証するため、両条件における握力の値を比較した。以下の図1に示すように、微笑み表情を表出している最中における握力の平均値は37.2kgであるのに対し、ニュートラル表情を保持している場合、握力の平均値は44.2kgであった。この差は統計的に有意であり（ $t(26)=2.09, p < .05$ ）、上記の仮説を支持するものである。

表情と感情の関係

それぞれの表情を表出した場合における、主観的な感情状態を質問紙により測定したところ、図2に示すように両者の間にまったく差は見られなかった。本実験では、表情の表出が感情の生起をもたらすという結果は得られなかった。

考 察

結果のまとめ

本研究では、微笑みを表出することで身体的能力が低下し、実質的に搾取が不可能な状態となるのではないかという可能性を検討した。実験ではこのことを検証するために、ニュートラル表情と微笑み表情をそれぞれ表出している最中の身体的能力を、握力を指標

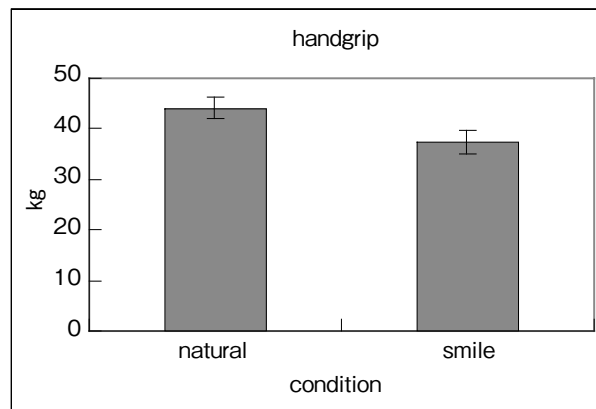


図 1

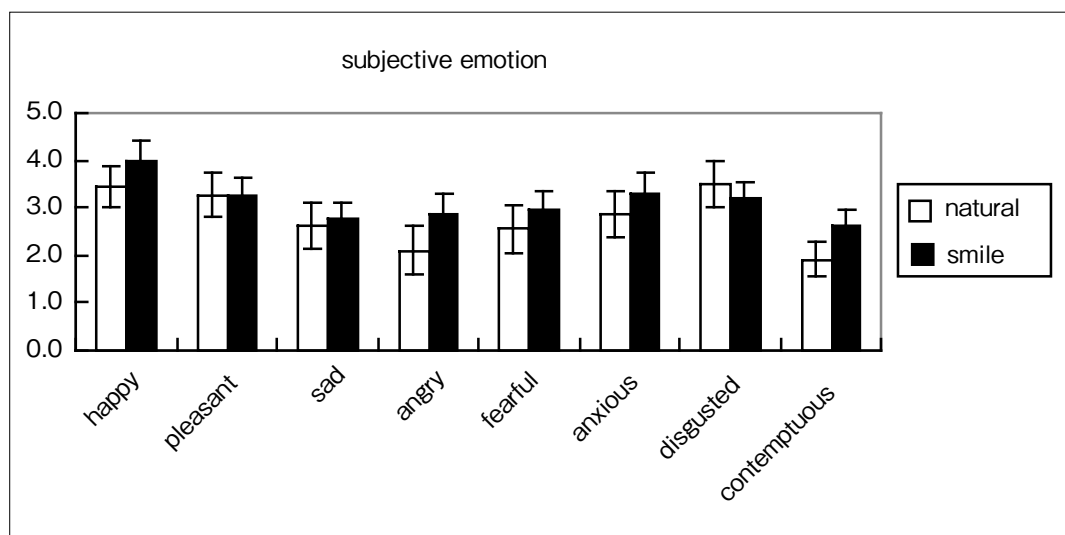


図 2

として測定したところ、仮説どおり、微笑み表情を表出している最中において身体的能力が低下することが明らかになった。この結果は、対人相互作用場面における微笑みの表出が、他者を搾取する意図をもたないことを実質的に裏付ける正直なシグナルとして機能している可能性を示唆する。

問題点

本研究は、人が示す表情の生態学的なコストーベネフィット関係という、現在までの表情研究があまり触れてこなかった点に注目した。それゆえ、一つの実証研究に過ぎない本研究ではカバーしきれない様々な問題も多く残されている。

例えば本研究では、実験実施に伴う制約により、女性のデータを集めることができなかった。生態学的には男性と女性の間に大きな行動戦略の違いが見られる場合もあるため、女性においても今回得られた結果が再現されるかを検討する必要があるだろう。

また、本研究ではニュートラル表情と微笑み表情の2種類の表情にのみ注目した。しかしながら、両者の間での身体的能力の差を指し示すだけでは、微笑みが搾取の意図を持たないことを示す表情として用いられる理由を十分には説明できない。なぜなら、例えば悲しみ表情を表出している最中にも身体的能力が低下するのであれば、なぜ悲しみでなく微笑みが他者への友好を示す表情として使われるようになったのかという問題が新たに浮上するためである。今後は他の感情表情の表出に隠された生態学的な理由を明らかにすることで、こうした問題に取り組んでいく必要がある。

引用文献

- Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind*. New York: Harper & Row, Publishers Inc.
- Bugental, D. B. (1986). Unmasking the “polite smile”: situational and personal determinants of managed affect in adult-child interaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 12, 7-16.
- Jakobs, E., Manstead, A. S. R., & Fischer, A. H. (1999). Social motives and emotional feelings as determinants of facial displays: the case of smiling. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 424-435.
- McHugo, G. J., Smith, C. A., & Lanzetta, J. T. (1982). The structure of self-reports of emotional responses to film segments. *Motivation and Emotion*, 4, 365-385.
- Matsumoto, D., & Kudoh, T. (1993). American-Japanese cultural differences in attributions of personality based on smiles. *Journal of Nonverbal Behaviour*, 17, 231-243.
- Strack, F., Martin, L., & Stepper, S. (1988). Inhibiting and facilitating conditions of the human smile: a nonobtrusive test of the facial feedback hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 768-777.